

敬学会

Note—Book

Made of Paper
Specially Prepared in Tokyo



お金の歴史



5—3

安藤仁一



敬学会賞第十九回入選作品

大学館30

目 次

1. どうして研究をしたか —
2. 日本のお金の歴史 — 1P ~ 3P
3. 紙幣のおこり — 3P ~ 5P
4. むかしのお金 — 6P ~ 7P
5. 家にあるむかしのお金 — 7P ~ 9P
6. 寛永通宝の説明 — 10P
7. 中国のお金の歴史 — 13P ~ 17P
8. 世界のおもな国ぐにのお金の基準 — 18P ~ 19P
9. 家にあるむかしの外国のお金 — 20P ~ 21P
10. ヨーロッパのお金の歴史 — 21P ~ 22P
11. お金のはたらき・お札のできるまで — 23P
12. むかしのお金のいろいろ — 24P ~ 27P
13. むかしのお金・現代のお金 — 28P ~ 38P
14. 銀行にいて調べたこと — 39P ~ 41P
15. 日本銀行について — 42P ~ 43P
16. まとめ・はんせい —

どうして研究をしたか。

おやつに買ってくるビズケットの中にいろいろな昔のお金がいっていたのを見て変わったお金があったんだなあと思いきもって調べてみたらいろいろなおもしろいことがわかるんじゃないかと思い研究を進めました。

研究につかった本

1. お金のうごき
2. 日本の商業とお金のはたらき
3. お金の話
4. 学習百科事典
5. お金の本

協力してくれた人

山形銀行のおじさん 田中先生
商業のおねいさん 市役所のおにいさん
うちの入 新庄のおじさん

お金の歴史

日本のお金の歴史

一人一人がかりにこうかんする物々こうかんがおこなわれた。

↓
人々の生活も豊かになり近所にすむ人の数もましてくるいろいろな品物がほしくなってきた。そこで場所と日をきめてその日にみんながその場所にあつておたかいにこうかんするようになった。このような場所が市場です。

↓
物と物とをこうかんするのに便利な方法を見つけた。(お金の使用)
(いつからお金をつかい始めたか)

日本と唐の国とがたかいにこうかんはじめたころ(西暦600年)には唐の国からお金が輸入されてきたということです。そのころ唐の国では開通元宝というお金が使われていましたがこのお金が日本のお金のもとになったといわれています。

(日本ではじめてのお金)

和同開珎だといわれています。

奈良時代の元明天皇のとき和同元年(708年)の1月につくられたといわれています。

(和同開珎の値うち)

和同開珎は銅が主成分です銅銭1文で二升四合のお米が買えたといわれています。お米一升をたいたい100円としますといまのお金にして約240円くらいの値うちがあったことになります。

和同開珎ができてからのちいろいろのお金がつくられました。和同開珎を加えて12種類のお金がつくられました。これを皇朝12銭といわれています。

(皇朝12銭の種類)

和同開珎	和同開珎	萬年通寶	神功開寶	隆平永寶	隆平永寶
日本最初のお金	天平宝字4年(760年)につくられた。	天平神護元年(765年)につくられた。	延暦13年(795年)につくられた。		

富ふ寿しゅ神しん室むろ

富 壽
寶 神
弘仁9年
(818年)に
つくられた。

承和昌室

承和
察貝
和昌

承和2年
(835年)
につくられた。

長年文寶

長年
寶大
嘉祥元年
(845年)
につくられた

饒益神宝



 饒益神
 貴
 貞觀元年(859年)
 につくられた。

貞觀永宝

貞観 13年
(870年)
につくられた。

寛平大空

寛平大造
寛平2年
(890年)に
つくられた

延喜通宝

延喜通宝
延喜7年
(907年)
につくられた

乾元大造

乾元大寶
天徳二年
(958年)
につくられた。

(奈良時代の物価)
(都の物価)

すみ  = 30文

ふで = $\begin{cases} \text{上等} & 30\text{文} \\ \text{下等} & 1\text{文} \end{cases}$

白米 11文
(今の4合 約0.57キロ)

絹布  = 1,000文
(約5丈)

馬 = 稻 300束 (12,000文) うす くわ
5束 (200文) 3束 (120文)

日本では皇朝12銭ののちお金をつくりませんでした。そこで宋から入れてきた宋銭がいつの間にかひろく日本で流通しはじめました。代表的な宋銭に嘉定通宝がありません。鎌倉時代にはこの宋銭がかなり流通していたようです。

嘉定通寶

室町時代に元の国は明という新しい国にほろぼされました。
日本はこの新しい明の国と貿易をはじめたので明のお金の**洪武通宝**
永楽通宝 **宣徳通宝**などがたくさん日本にはいってきて流通しまし
た。そのうち**永楽通宝**はながく日本のもとになるお金となりました。
また**室町幕府**も**永楽通宝**をつくっています。**織田信長**は品質の
わるくというお金として値うちのななものもあつたのでなんとかそれを
統一したいと思つた。永禄12年(1567年)にせんせん令を出しています。

豊臣秀吉は天下を統一すると全国の金山、銀山を全部その直接おさめる
領地にし天正大判という有名な大きな金貨をつくりました。
天正大判は天正16年(1588年)につくられた金貨です。

徳川家康は文禄5年(1595年)に後藤彦三郎という人に命
令して金銀の貨幣をつくらせ江戸の本町1丁目(今の日本銀
行のあるところ)に金座をもうけました。銀の貨幣は銀座でつくられました。
家康は慶長6年(1601年)に金貨では大判小判1分判の3種類を
作り銀貨では丁銀・豆板銀の2種類をつくりました。これらの金
貨や銀貨のはたらきをたすけるお金として寛永13年に銅銭と
して寛永通宝をつくりました。

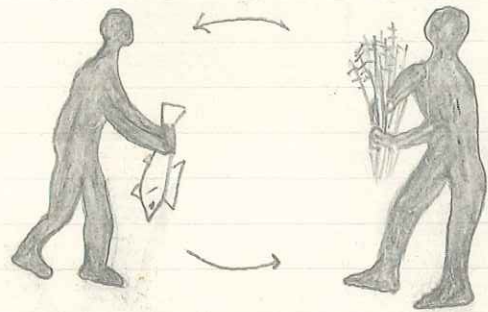
(紙幣のおこり)
日本ではじめて発行された紙幣は羽書^{はがき}といいます。羽書は富人の間でやりとりする1種の子形のようなはたきをしました。のちには、この羽書を現金にかえてくれる両替屋^{りょうかえ}も生まれ銀をおいとして1匁、5分、3分、2分の4種類があらうです。またのようなものを銀札ともいいます。4年大にはお金の基^{もと}となる楚^そを定める規則がきまりましたか、このとき金貨は20匁、10匁、5匁、2匁の4種類とし

上品なものをいれたりはななものをつくりました。銀貨は1円50銭、20銭、10銭、5銭の5種類としました。明治6年に1銭と半銭、明治7年に2銭と1厘が出されています。

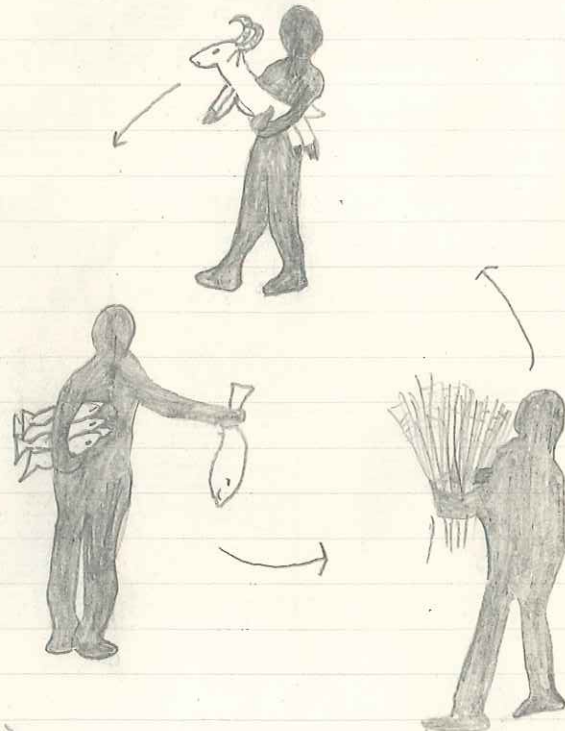
日本銀行がお札を発行するようになったのは、明治18年からです。

(交 換 の 発 達)

① 物々交換。



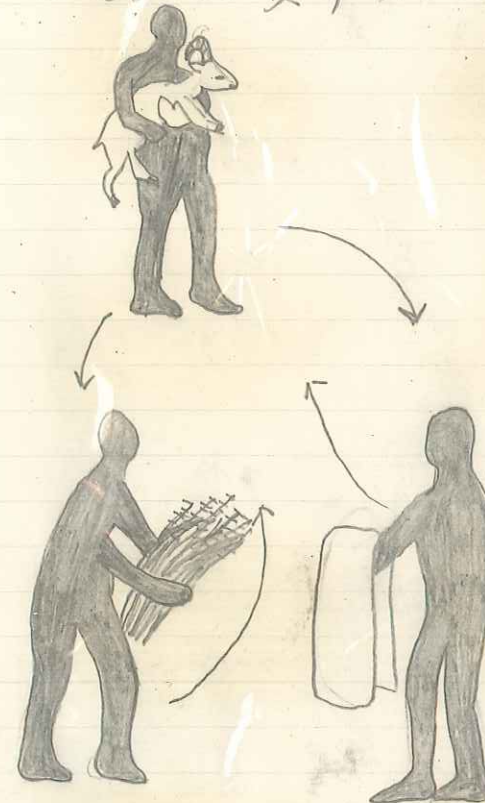
② 多角的の物々交換。



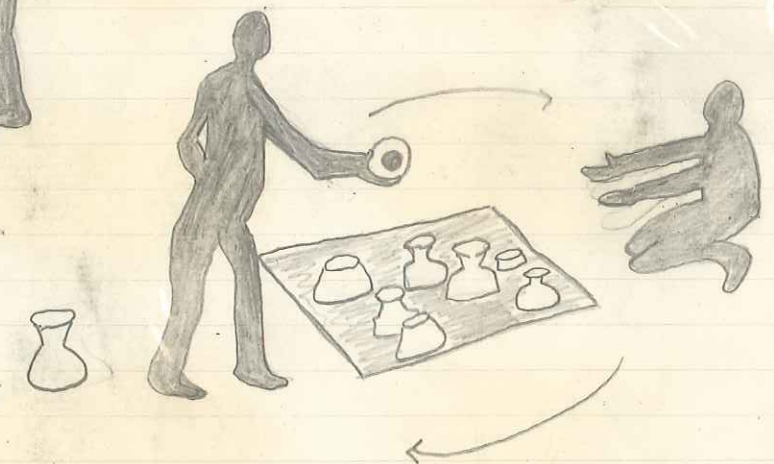
(時 代 の

原始時代	大和時代	奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代	江戸時代
	700年	800年		1334年	1477年	1573年 1603年

③ 品物に貨幣のはたらきをさせる。



④ お金によって品物の取引をする。



流 水)

戦国時代	安土桃山時代	江戸時代	明治時代	大正時代	昭和時代
			1867年	1912年	1926年



(安政 =
朱判銀
1859~1874)

ぜっかくの貨幣も都の市を平いしてつかわれただけで地方では、物々こうかんがおこなわれた。

物々こうかんは<日本では米などが多くつかわれた。中国では貝や刀などが多くつかわれた。

ほくが 母のじっかによってもらってきたお金です。

ここには、た お金の買通永宝は 1636年(江戸時代)のころのお金です。50銭と5銭と10銭は、明治4年のころ、半銭と1銭は、明治6年のころのお金です。

祖母が生まれたのが明治35年だそうです。だからそれよりもずっと前のお金だとわかります。代々つたわってきたのだそうです。

祖母が子どものころのお金は、1文・2文・5厘・1銭・2銭・5銭・10銭・20銭・50銭・1円・2円・5円・10円・20円・あとは、今とおなじになっていたそうです。

札の方は、100円札・50円札・20円札・10円札・5円札・1円札・50銭札・10銭札などがあつたそうです。

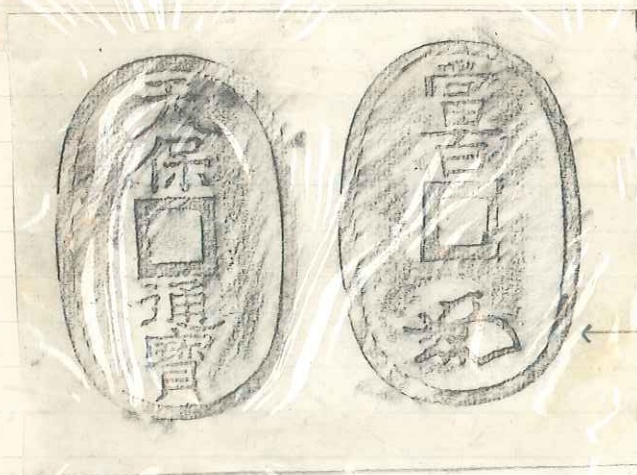
今では、そのときのお金のねうちより250倍くらい上からそのため銭の単位がなくなったようにみえるのです。



寛永通宝

左にはあるのは同じ寛永通宝でも大きさがちがいます。寛永通宝は西暦1636年(江戸時代初めにでまわったお金です。江戸を中心に道が開け交通がさかんになったころです。商業が発達し大阪、江戸の商人がさかんにかつやくしました。大きさがちがうのは年代によってちがっているようです。

ぼくの家にくる銀行のおじさんにも協力してもらいました。天保通宝は西暦1835年のころでまわったお金です。手に持ってみると重くかんじます。50銭もぼくの家にあるのとは、大きさも重さもずいぶんちがいます。明治31年に作られたお金です。ぼくの家にあるのは大正12年ですから大きさも重さも、年がたつにつれてだんだん小さく軽くなって、きているようです。なお、50銭は今のお金になおすとだいたいの300円ぐらいだそうです。おとうさんの子どものころにつかた10円札もありました。



作た人の名前

天保通宝

きんぎで作られた。

作た人 光次



50の銭

一銭

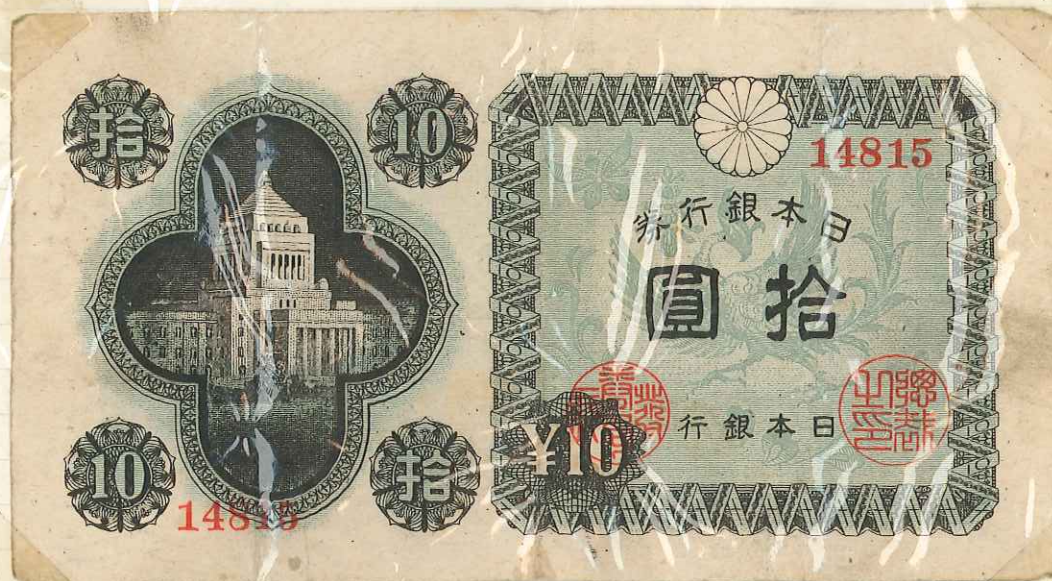


一銭



五銭





わたしたちがふだん使っているお金には、ふつうは金どくでつくられた金どく貨幣と紙幣のようにすべての人々が信用してつかっている信用貨幣の2つになります。

金どく貨幣—お金の材料として使われている金どくには、金、銀、銅、ニッケル、アルミニウムなどがあります。しかしこれらの金は1種類だけか、そのまま使われているのではなく2種あるいは3種の金どくが混ぜあわされてお金がつくられているのです。たとえば金貨は金だけではやわらかすぎるので銅などか混ぜあわされているのです。

中国のお金の歴史

(お金のはじまり)

世界でいちばん早くお金を使ったのは中国の人であつたといわれています。中国で最初にあつたお金は布貨とか刀貨とか貝貨といわれるものでした。

- 布貨 ———— このお金はくわやかすの形をしたもので布でできたものではありません。周の時代のものといわれています。
- 刀貨 ———— 刀貨といっても刀のことではなくものを調理するときを使うほうちうであつたといわれています。
- 貝貨 ———— 形のきれいな貝をえらんでお金として使つたものでした。のちになまりや銅を貝の形にして使つたこともあります。

そのほか、きひ銭というのがあります。これはたえん形のもので人間の顔がついているお金です。

秦の時代に半両銭というお金がつくられました。

西□半

漢の時代に五銖銭というお金がつくられました。銅銭で、いじょうに使いやすかつたので、のちの世までお金の基本とされました。

銖□五

(このころのお金のつくり方)

まず基本になるお金を石か銅、あるいは青銅で、いいねいにつくります。これを型にしてねんどで、いかにたをつくり、そしてろうをねんどの表面にぬり、そこへ金属をとかいてながしこんでお金をつつたと思われ、またお金のふちをあつくしてあるのはお金をきりをとることを防ぐためです。

唐の時代に開通元宝というお金がつけられました。
このお金は中国ばかりでなく日本でものちの世まで
お金の基本とされました。



その他のお金として

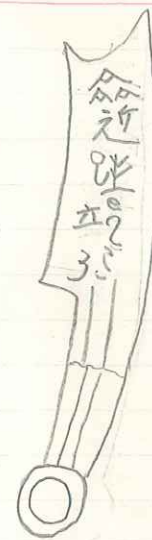


宋の時に鉄のお金がつくられたこと世界でいちばん早く紙
幣が使用されたことです。鉄のお金は中国の四川地方でつくられま
した。四川は銅があまりとれなく鉄がたくさんとれました。

銅銭が少なく鉄銭とこうかんするわりあいはじめは銅銭1つ
に対して鉄銭が2つであたか宋の終りごろには銅銭だけで
品物を買おうとすればたくさんもちはいなければならず重くてた
いへんなので紙幣が発行されました。

(時代の流れ)

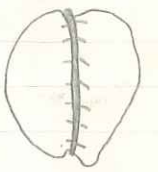
原始 時代	殷 時代	周 時代	秦 時代	漢 時代	三國 時代	晋 時代	南北朝 時代	隋 時代	唐 時代	五代 時代	宋 時代	元 時代	明 時代	清 時代	中華民国 時代
----------	---------	---------	---------	---------	----------	---------	-----------	---------	---------	----------	---------	---------	---------	---------	------------



布幣
こひり



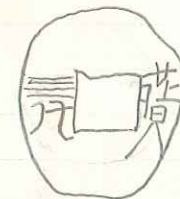
布幣
ふか



布幣
ふか



布幣
ふか



布幣
ふか



布幣
ふか



滿 州 (10 錢)



滿 州 (1 錢)



滿 州 (10 錢)



滿 州 (1 錢)



滿 州 (5 錢)



滿 州 (5 錢)

韓 國



中 華 人 民 共 和 國



中 華 人 民 共 和 國



世界のおもな国ぐにのお金の基準

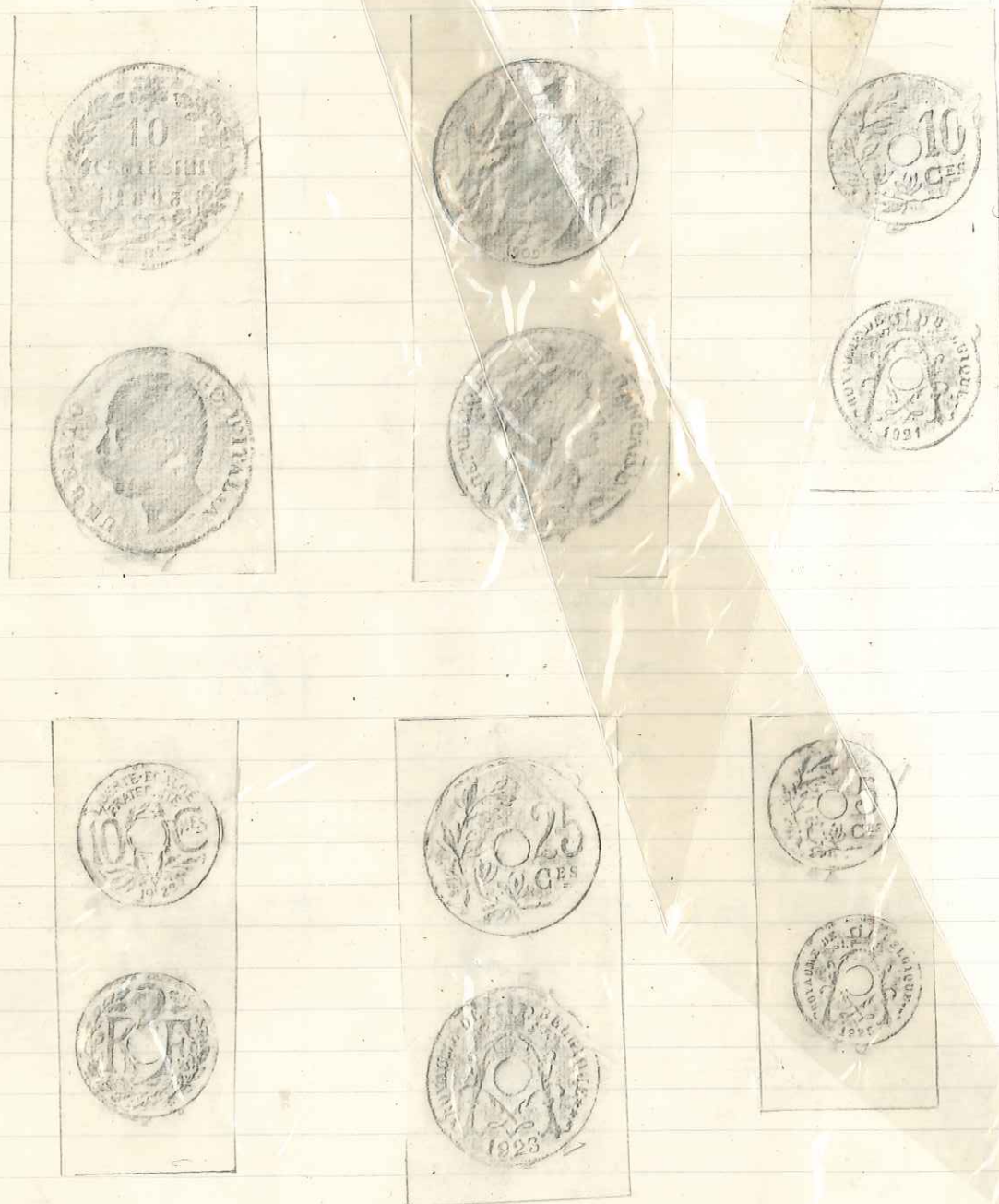
国名	通貨	円換算
米 国	ドル	¥ 360.00
英 国	ポンド	¥ 1008.00
カナダ	ドル	¥ 350.32
ス イ ス	フラン	¥ 83.59
ド イ ツ	マルク	¥ 90.00
スウェーデン	クローネ	¥ 69.59
フランス	フラン	¥ 72.92
オランダ	ギルダー	¥ 99.45
ベルギー	フラン	¥ 7.20
オーストリア	シリング	¥ 13.85
デンマーク	クローネ	¥ 52.12
イタリヤ	リラ	¥ 0.58
ノルウェー	クローネ	¥ 50.40
ポルトガル	エスクド	¥ 12.57
アルゼンチン	ペソ	¥ 4.38
オーストラリア	ポンド	¥ 806.40

国名	通貨	円換算
ブラジル	クルゼイロ	¥ 19.46
ビルマ	チャット	¥ 75.60
コスタリカ	コロン	¥ 64.11
ドミニカ	ペソ	¥ 360.00
ホンコン	ドル	¥ 63.00
インド	ルピー	¥ 75.60
パキスタン	ルピー	¥ 75.60
フィリピン	ペソ	¥ 180.00
スペイン	ペセタ	¥ 6.00

この基準はアメリカのドルを中心にした基準です。1ドルを360円としたはあいを示してあります。

この表を見ると英国のお金のねうちがいちばん高いということがわかります。

[家にあるお金の外国のお金]



田中



[ヨーロッパのお金の歴史]

ヨーロッパの人々ははじめ遊牧生活といって羊や牛を
 かって草をむねながら草原から草原へとわたり歩く生活を
 あくっていたのでいちばんはじめに お金としてつかわれたのは、

羊や牛であったといわれます。
 1番最初とおもわれるお金は金銀とを混ぜてつくられました。このお金を「エレクトロン」といわれていました。

お金のはたらき

- (1) 品物と品物のこうかんのとりつきをする。
- (2) 品物のねうちをきめてくれる。

お札のできるまで

1. 原版彫刻

お札のもようのおもなところは凸版です。

2. もよう検査

印刷のすえたものは大判のまげえじゅうな検査します。

3. ふらほう作業

種類別、数量別、金かく番号などをしるしたつみ紙に千枚ずつつみとじたところに印刷局のしるしをおして、たん日本銀行におさめられてから取引につかわれます。

現代のお金には、100円銀貨・50円ニッケル
 ・10円青銀貨・5円黄銅貨・1円アルミニウム
 紙幣には、100円・500円・1000円・5000円・10000円

などがあります。これらのお金は日本銀行で発行されます。

昭和20年前までは日本政府で発行されていました。



同じ日本政府の50銭紙幣だが年代によってもようがちがっている

26



27



日本銀行券行

(銀行にて調べたこと)

京銭 (外來銭)

39ページに説明
してあります。

文銭

京都の大佛をこわ
した銅で鑄銅銭
といわれさいなん
よけのまじないと
された。

広く流通する
意味の波のまよう



明治3年 20銭



明治4年 50銭



明治15年 2銭



明治22年 5銭



明治 36年 1円



明治 38年 10銭



大正 11年 5銭



昭和 12年 50銭



昭和 13年 1銭



昭和 13年 10銭



昭和 21年 50銭



1 円



5 円



5 円



10 円



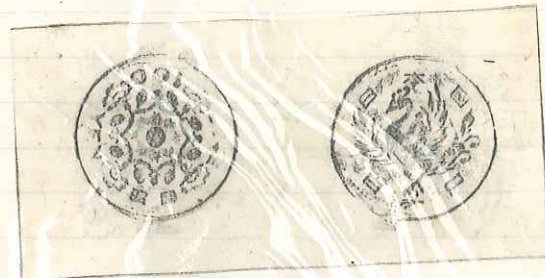
50 円



50 円



オリンピック硬貨
100円



100円



オリンピック硬貨
100円



オリンピック銀貨
1000円

(両羽銀行に行って調べたこと)

(宋銭の説明)

むろ町以前、宋の国から輸入した銅銭で皇朝12銭の不足をおぎなった。平安〜桃山時代の六百年間は皇朝12銭 支那銭・私鑄銭などが混用されつつ貨幣の流通は次第に本格的になった。

寛永通宝は江戸時代(1636年)〜明和年間の130年間にたりにちゅうぞうされた。わが国の古い年月にもっともたりにちゅうした。

支那のお金は行事によって使われるお金があります。

たとえばおいわいごと・不幸などに使われるお金と、一般につかわれるお金とわかれていきます。

満州では戦争がおこるたびにお金がたんたん小さくなっていった。

—40— (銀行に行って調べたこと)

新円切かえのときに新円がたりなくて
いままでの紙幣の右上に証紙をはって
使われることもあった。

昭和13年(きげん2598年)にでまわった50
銭札には「ニホン」というもじがはいって
いる。

日本で貨幣の制度がととのってきたのは明治
になってからのことです。日本の貨幣の制度を
つくりあげていったのは伊藤博文や大隈重
信といったような明治維新にこうせきの
あたる人たちでした。

今日、日本貨幣の単位は円となっていますが
これを円とされたのは1869年(明治
2年)からです。

円とつけられた理由は明治政府は江戸時代
のすえいろいろな貨幣がたくさんつくられてごちゃ

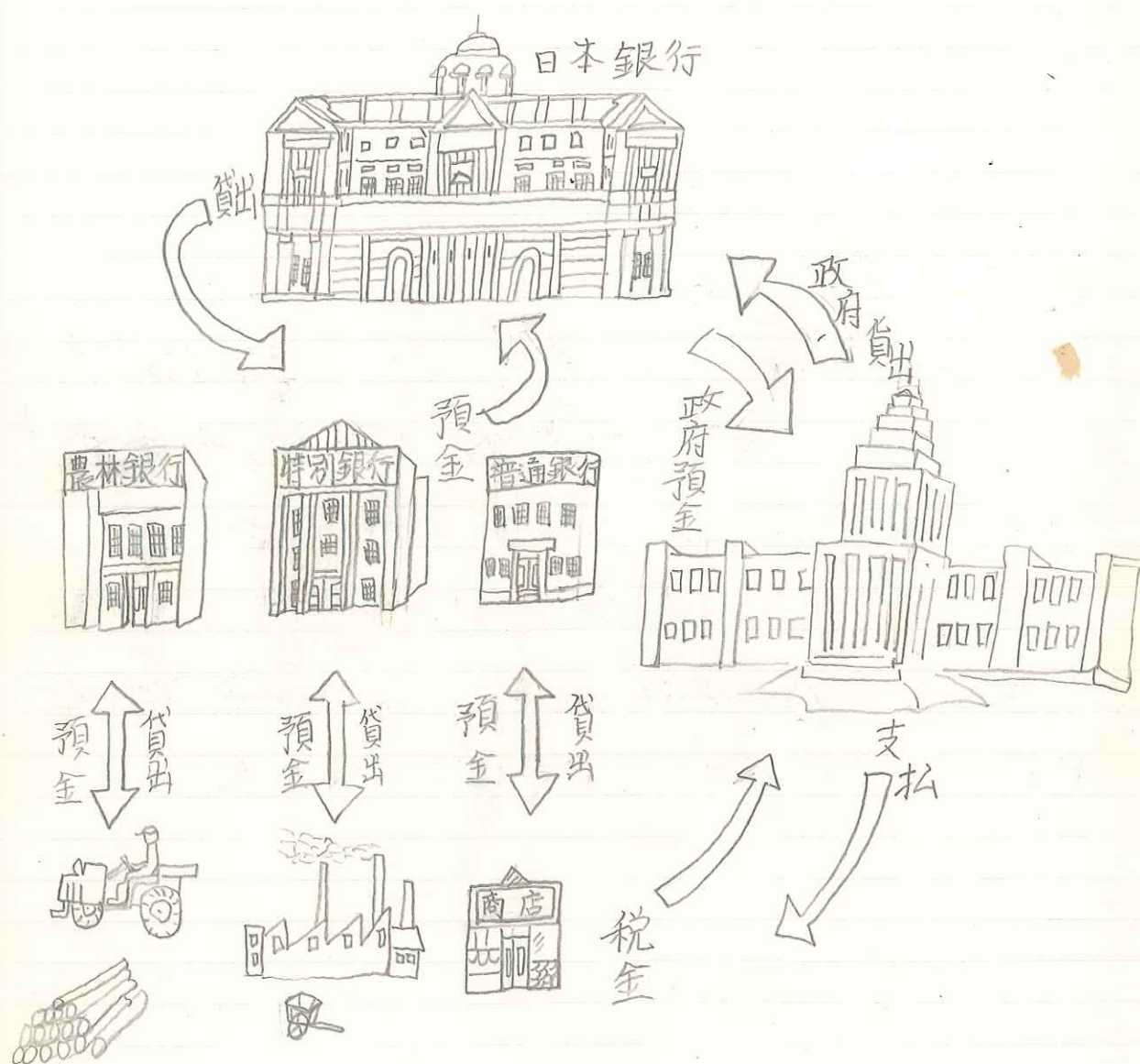
—41— (銀行にいったって調べたこと)

ごちゃになっていたのをせいりして新しいりっぱ
な貨幣をつくらうとしました。その時新しい貨幣
の形をどうするかなかなかきまりませんでした。
四角の貨幣をつくらうとしましたが四角の貨幣
だと人から人へとぐるぐるまわってゆくあいだ
すりつってしまふ。まるいお金だと人がおやめ
ひとひとさしゆひとをまけてまるい形をしめせ
は、たれもお金だということがわかる文化の進んだ
アメリカ、ヨーロッパのお金の形はみなまるい形をし
ているというような理由です。

政府は外国からお金をつくる機械を買
い入れ1871年(明治四年)にお金をつく
る役所をつくり伊藤博文の意見によって金
貨をつととする金本位制度がつけられました。
そして20円・10円・5円・2円・1円の金貨が
つけられました。

(日本銀行について)

日本銀行のしくわり



日本銀行は、1882年(明治15年)に作られました。
日本銀行は、日本銀行券というお札を出します。日本

銀行は、全国の銀行です。日本銀行は、政府の銀行でもあり政府のお金をあずかりました。政府にお金を貸します。

(まとめ)

お金がなかった時代、物々交かんがおこなわれた。市場ができて物と物とを交かんするのに便利な方法を発見した。(お金の使用のはじまり)
物々交かんは日本では、米・中国では貝や刀などが多くつかわれた。唐の国のお金をすねした。日本ではじめてのお金は和同開珎です。

お金のうつりかわり

古代	まだ本当の貨幣はできて をするものとして米とか布と	いない。その後貨幣の働き かの物品貨幣が行なわれた。
奈良	中国制度をまねして一とどおりの 都会の一部にしかつかわれなかった。 試作でいいだった。	銭はできたが、大きな 金銀銭はまだ
平安	砂金や板の形をした金銀が流 ったかわれた。 銭の流通も本格できになった。	通しだし、地金のまま
鎌倉	金銀はしだいにつかいやすい 銭には日本国内にかなり多くな 出はじめた。	形となった。 ったが私鑄銭が
室町	銭には外来銭、私鑄銭がこんよう 明の永楽通宝が輸入されて貨幣	された。 としてつかわれた。
安土・桃山	このころになって金の産出が多く、豊臣 各地で金銀貨が作られた。	秀吉は大判金を作った。
江戸	幣制が確立し、目方を量って目方を量 から次第に価格そのまま使える定位 このころから紙幣がうまれた。	て使う秤量貨幣 貨幣にうつった。



むかしの紙幣の肖像
として。

武内宿禰
日本武尊
聖徳太子
藤原鎌足
和気清麻呂
坂上田村麻呂
菅原道真
などがいる。

坂上田村麻呂を除
いたほかは明治
20年12月以後、
約60年にわたって、
発行された。紙幣
に登場された。

札についているアルファベットや数字の説明 例えは

M 672201 A
|| || ||
記号 番号 製造工場の印

わが国には印刷工場が四工場ある

- ① 瀧野川
- ② 酒匂
- ③ 静岡

で製造されるものは
関西以北で使わ
れる。

- ④ 彦根
(滋賀)
- で製造されるものは
関西以西で使われ
る。

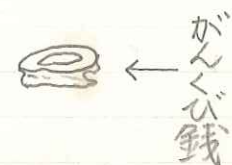
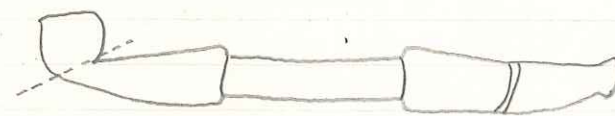
富士銀行のお金の展覧会の感想

10月28日の日に富士銀行に行って古銭を見てきた。
たくさんあって、中国の古刀貨をはじめ貝貨や魚幣や布
幣などまた見たことのないお金がたくさんあった。日本で
はじめての和同開珎など各種あった。慶長大判など
あったものだ。紙幣も明治時代～昭和時代や第1.2次
世界大戦のときのお札や日本ではじめてのお札もあった
紙幣を見ていくとどここの紙幣もアルファベットや番号が

っている。そのほかにはオリエントの記念金銀貨・ケ
ネケイ記念銀貨などいろいろな国の金銀銅などの
お金があった。とくにおもしろいのが、かんくび銀だった。
かんくび銭はむかしつかったきせるというパイプのよう
なものの頭もとり、かなすちでたたいてたいらにし、作た
のお金をかんくび銭という。ぼくはお金にはまるいもの
となかいまるいものとしかくいお金しかないと思った。
たかひょうたんのようなものや、かち、かちしていた
お金や顔のようなお金がたくさんあった。ぼくは展覧
会にいて、とても多くあるのでうらやましかった。

51P～52Pにお金の説明書がはってあります。

かんくび銭の図



かんくび
銭

反省

むかしのお金の研究をしようと考えたが、何を見てしらべたらいいかわからなくてたいへんこまった。家の人も、わすれてしまっていたし本をみてもほくにわからないことはばかり多くて、最後まで研究できるかい西己だった。最初、は本をたよりにして調べてみた。夏休みに母の実家に行った時、祖母からもらってきたお金と家にあるお金とで、だいたいのむかしのお金の形がわかってきた。ビズケットについてくるむかしのお金の歴史なども参考にした。家に遊びにきた新庄のおじさんも、ほくの研究をきいてわざわざむかしのお金をおくって下さった。いろいろなお金の種類が集まったずいぶん変わったお金もあり研究しているのが楽しかった。銀行にも五回行って調べた。

いついっても銀行ではいそがしそうだったので、少しづつしか調べられなかったが、日本のお金のいろいろな事についておしえて下さった。

親類に銀行のおじさんやいるのでそこへもたずねて

いて話をきいてきた。研究がすすんでくるとだんだんおもしろくなってきた。調べるのが楽しかった。

藩札の発生

徳川幕府は幕府の勢力を強めるために、各大名に大きな経済的負担をかける政策をとりましたので、各大名の藩の財政は非常に苦しくなりました。そこで各藩は藩の財政をまかなう便法として、幕府の許可を得て、藩内限り通用のいわゆる藩札を発行するようになりました。その発行方法は藩の札奉行のもとに、藩領内の信用ある有力者を札元として発行引換えに当らせられたものが多かったのですが、ほとんどが金銀準備の裏付けのない不換紙幣でした。藩札の発行額が増加すれば、それだけ公用貨の流通がさまたげられるので、幕府では次第にこれを禁止する政策に変わりましたが、財政窮乏が激しくひそかに発行した藩もありました。

寛文元年（一六六一）越前福井藩が最初の藩札を発行して以来、徳川中期には三四八藩のうち二七七藩が藩内限りの藩札を発行しております。藩札は大別して金札、銀札、銭札の三種で、特定の商品名を券面に表示しているものもあり、また印刷の方法は大部分が木版で、用紙は楮（こうぞ）、三桮（みつまた）、雁皮（がんび）などを用い、隠し文字あるいは透し入りなど、相当苦心して作られております。

明治開化期の紙幣

徳川幕府がたおれたのち、明治新政府は財政の窮乏を救うため、明治元年四月、まず太政官札を、次いで民部省札、大蔵省兌換証券、開拓使兌換証券などを相次いで発行しましたが、形式は縦長で従来どおりの形でありましたので、これでは文明開化を唱える明治時代にあふさわしくないといわれ、明治三年には意匠をあたらしくしたドイツ製の新紙幣が製造され明治五年から使われました。しかし同年には国立銀行条例が發布され、アメリカ製の日本紙幣が流通、その後ようやくわが国でも洋式印刷技術が緒について、明治十年最初の洋式印刷による改造国立銀行紙幣が製造され、十四年には世人の眼を見張らせるような美しい俗に神功皇后札といわれる紙幣ができるようになりました。



日本銀行券



日本銀行兌換券



日本銀行兌換銀券



日本銀行設立以後

明治維新以来、政府は前に申し上げたように次から次へといろいろな紙幣を発行し、しかもほとんどが不換紙幣であった上、明治十年の西南戦争に当って巨額な不換紙幣を発行して戦費を調達しましたので、政府紙幣の価値は非常に低落し、この頃から政府紙幣と銅貨との間に打歩（交換価格の差）を生じました。例えば、明治十四年四月には銀貨一円に対し政府紙幣は一円七十九銭五厘にまで低落し、一円の品物を買うのに銀貨ならば一円でよいが、紙幣で買えば一円七十九銭五厘出さなければならぬという状態になりました。この対策として松方正藏卿は増税、国費大削減などデフレーション政策を断行し、紙幣の発行量を減らして銀貨と紙幣の打歩をちぢめ、更に幣制統一を図るために中央銀行の創設を企画して明治十五年十月、今日の日本銀行が開設するに至りました。こうして明治十八年五月、はじめて「日本銀行兌換銀券」が発行され、それまで流通していた各種の紙幣はすべてこの兌換券に代えられることになりました。この兌換券は当初は銀貨と引換えられる建前で、券面には「兌換銀券」と書かれてありましたが、明治三十年、金本位制の採用により、三十二年からは図案様式を代え、「日本銀行兌換券」という名称になり、金貨と兌換されることになりました。そして前に述べたように金本位制度に若干の変遷があったのち、昭和十七年に至り日本銀行条例が廃止され、あたらしい日本銀行法が公布されて、わが国の通貨制度は完全な管理通貨制度となり、日本銀行兌換券は単に「日本銀行券」という名称になりました。

以上のように現在に至るまでに、わが国の紙幣は幾度の変遷を経ましたが、それぞれの時代に発行された紙幣の紙質や図案などは、いずれもその時代の面影を伝えているのでありまして、過ぎし日の経済、社会の思い出をよび起してくれます。例えば最近でも太平洋戦争時代には紙質は悪く、図案は軍国主義の色彩の強いものでありましたが、戦後の窮乏時代を経て現在の千円札は良質紙が使われており、印刷もまた著しく進歩しましたし、図案も民主的、平和的なものに改められております。



国立銀行券(旧券)



国立銀行券(改造券)



改造紙幣(神功札)



新紙幣



太政官札 民部省札

藩札



幕府札

鑄貨



貝貨



魚幣



刀幣



布幣



環幣



開元通宝



和同開珎



永樂通宝



慶長大明



一分銀



二分金



小判



丁銀



豆板銀



寛永通宝



寛永通宝



天保大判



天保通宝



20円金貨



貿易銀



50銭銀貨



1銭銅貨



紙幣



私札



(お金の説明書)

中国銭から和同開珎銭まで

わが国ではじめて金属製の貨幣ができたのは八世紀の初めのことです。それ以前は、現在われわれが使っているような貨幣は用いられていません。布とか繭とかの物品が貨幣の代りに使用されてきました。ところが、中国では西暦前八百年も前から金属貨幣が製造されており、一般に流通しておりました。もちろん中国でも最初から金属貨幣が使われていたわけではなく、いまから三千年ほど前は、自然のままの貝がおかねとして使われ、のち銅製の貝貨、時代を経て、魚幣、刀幣、布幣、環幣というように便利なる形態に変わりました。秦の始皇帝(紀元前三二四—二一〇)の時に、はじめて銅貨の統一が行われ、四方形の孔が中心の穴が四角なもの、銅貨(金銀以外の銅貨)に統一されました。その後、唐の高祖時代の武徳四年(六二二)に開元通宝が造られたのですが、この銭貨が遣唐使などによってわが国にもたらされて、元明天皇の和同開珎(七〇八)に、これを模範としてわが国最初の銅貨が製造されました。有名な和同開珎がそれです。

しかしその頃は、一般民衆は貨幣を使用する習慣もなく、その使用も知らなかったもので、永い間根づき習慣で、いまだに布幣や刀幣などの貨幣の代りに使われ、貨幣が造られたものの、因循に流通するに至りませんでした。そのため当時の政府はいろいろな法令を出してこの貨幣を使わねばならないように仕向けると同時に、和同開珎が製造されて、三〇年後、天徳二年に乾元大寶が造られるまでに、十種類の銅銭を造り出して貨幣の流通に努力しました。この銅銭は皇朝十二銭といわれ、いまもわが国初期の銅銭として珍重されております。

外国銭の流入と徳川時代

平安朝の末期から鎌倉時代にかけて、経済が発展するに従い、貨幣がより必要とされる時代になりましたが、わが国ではそれまであまり普及していませんでした。特に商業の発達に伴い、貨幣の需要は急激にさかんになり、少くも皇朝銭だけでは需要を充たすことができなかったため、高倉天皇の嘉應元年(一一六九)頃から中国銭はじり、安南などの銭貨が多量に移入されるようになります。これらの外国銭が徳川時代初期までわが国の通貨として一般に流通したのです。

豊臣秀吉は天正十六年(一五八八)に世界最大の金貨と称される天正大判金を製造しましたが、ついで徳川家康は寛永に意を用い、寛永六年(一六二九)金銀の貨幣制度を確立して大判、小判、一分金、丁銀、豆板銀など五種類の金銀貨を発行しました。こうして金銀貨は一定の単位に統一されましたが、銭貨についてはまだ外国産銭が使用されておりましたので、三代将軍家光の寛永十三年(一六三六)に至って、寛永通宝を法定通貨に定め、ここに金銀銭二元制度が完全に確立されました。そして寛文十年(一七二〇)には外国銭の通用を禁止し、名実ともに貨幣制度は全国的にわが国独自のものになったのです。

徳川時代の貨幣単位は現在のようにならず、一兩以下は四邊法を採っており、すなわち一兩の四分の一が一分、一分の四分の一が一朱というふうです。そして金銀貨はいろいろの品位のものがあつたために、それぞれ交換する相場が違っており、銭貨に対しては相場が異なるというように非常に複雑なもので、丁銀、豆板銀などのように、はかりにかけては秤量貨幣もあつて、いまだに想像もつかないほど複雑なものでした。

このような状態であつたなかで、徳川五代将軍綱吉の元禄時代から幕末の十四代家元の万延元年に至るまでの間に、幣制はますます乱れました。それは貨幣の需要が増加したのに反して金銀貨が海外に流出した一方、幕府の財政が苦しくなつて、財政不足を補填するために八回にわたつて悪貨を製造し、品位を落したからで、例えば慶長小判と万延小判を比較すると、量目で三割八五、金品位で千分の二〇も下り、お金の値打はなくなつて、徳川初期には小判一枚で六俵の米が買えたのに、末期には約一俵余りしか買えなくなつてしまつたのです。

明治から昭和へ

徳川幕府瓦解後、明治新政府は貨幣制度を根本的に改めることとし、明治四年五月「新貨条例」を頒布して、従来の両を単位とする四邊法を円を単位とする十邊法に改正、形も西洋各国の例になつて円形に統一し、本位金貨五種、一円貿易銀、補助銀貨四種、銅貨三種を製造しました。そして形の上では金本位制を建植したのですが、貿易銀はその後、国内に本位一円銀貨として通用しましたので、実際には金銀本位制になりました。

明治三十年、日清戦争による賠償金基礎として改めて近代的全金本位制度が採用されましたが、その後第一次大戦中の大正六年には金の輸出禁止が行われ、昭和五年の金輸出解禁までは完全な金本位制度でもありませんでした。しかも昭和五年の金解禁は早くも六年再禁止となり、銀行券の金兌換も停止されたので、この時を以て実質上金本位制度は停止されたのです。第二次大戦中の昭和七年に日本銀行法を改正する際、形式的にも実質的にも完全な管理通貨制が採られることになりました。

この間、現在に至るまでに、多くの金銀銅貨が発行されましたが、太平洋戦争中は銅貨やアルミ貨まで登場し、粘土を原料とする陶貨まで製造されました。最近では黄銅貨、アルミ貨、ニッケル貨が作られています。

私札が発行するまで

紙幣は世界各國とも銅貨ができてからはるかに遅れて用いられるようになったものです。それは紙幣は貨幣と違って額面額と素材価値とは非常に遠く、紙幣が流通するには大きな信用または強い権力の裏付けが必要とされないからです。しかし銅貨は重く、大量の携帯が困難で、取扱いに不便です。綿糸、損耗などのおそれ、わが国の紙幣はそうしたためばかりではなく、元和年間(六一五—一六四)に丁銀を流通に大きく切つて使つたことが禁止されたので、それまでに切つて使つて半端(はんぱ)になった銀貨に對し、引替手形が発行され、これが自然に紙幣として使用されるようになったものであり、伊勢山田発行のいわゆる「山田端書」(はきがきがわが國の紙幣のはじまりといわれています)のようになりました。町、村、宿、寺社、御所などが私製の紙幣を発行するようになりました。